【特集／文化芸術にできること――人をつなぎ、社会をひらく】

「外に出ていく劇場」が地域にもたらした力

――北九州芸術劇場の「観る」「創る」「育つ」「支える」

インタビュー　龍 亜希 × 吉松寛子

［公益財団法人北九州市芸術文化振興財団］

紫川にかかる橋上、北九州芸術劇場が入る「リバーウォーク北九州」を背景に、右から龍氏、吉松氏。

脇坂敦史＝取材・執筆
古里麻衣＝撮影

商店街や街角、学校や福祉施設、モノレールやクルーズ船さえ舞台になる。いわゆる〝開かれた劇場〟も超え、街のあちこちへ演劇やダンスが「飛び出していく」劇場が北九州は小倉の街にある。貸館や巡回公演をメインにする各地の劇場・ホールが、その存在意義を問われるなか、文化施設としての高いクオリティを維持しつつ、市民と共に新たな価値を創造し、時には地域の課題解決まで行う北九州芸術劇場。その取り組みの数々に、地域の文化芸術が担う役割を考えるヒントがぎっしり詰まった同劇場で、企画・プロデュースの中心的な役割を担われる龍亜希・吉松寛子の両氏から、詳しくお話を伺った。

街のあちこちに舞台や芝居小屋をつくったり、学校や福祉施設でアーティストがワークショップを行ったり、高齢者の記憶から生まれた戯曲を毎年のように上演したり……。どれも北九州芸術劇場が媒介となり、表現者、地域のさまざまな団体、そして住民たちが協力して実現してきた企画だ。

さらに、小倉駅ビルの開口部から上空へと滑り出す、近未来的なモノレール。2014年から行われた「日本初のモノレール演劇」のシリーズは、通常ダイヤの合間に運行される特別便で上演されたという、まさに舞台を乗せて空中を疾走する列車だ。観客（乗客）を未知の世界へ誘うように、演者たちは車両の中で歌い踊り、駆け回り、大きな話題を呼んだのは当然だろう。モノレールの運営会社と北九州芸術劇場が力を合わせて実現させた企画は、〝街のなかへ出ていく劇場〟という新しい「公共劇場」のあり方を可視化するものでもあった。

これらの取り組みは、私たちが「劇場」に抱く固定的なイメージを、心地よく揺さぶる。なぜ、そのようなことが可能になったのか。

上／走るモノレールを、そのまま舞台にした演劇公演の様子。下／北九州工業地帯の夜景観光クルーズを演劇とともに楽しむ公演も話題を呼んだ。写真提供／北九州芸術劇場

「演劇の街」の新劇場に期待された使命と役割

ご自身も地元・北九州市で生まれ育ったというプロデューサーの龍氏はまず、舞台芸術を観たり演じたりすることの好きな人が多い――そんな「演劇の街」としての土壌から語りはじめた。

「北九州工業地帯に立地する大企業や労働組合では、古くから演劇サークルをはじめ、歌や踊りといった表現活動が盛んに行われていたようです。東京や大阪などに比べ、大学などが果たす役割は小さかったかもしれませんが、工場で働く労働者らの活動から、市内に多くの劇団が生まれました。1993年に市制30周年記念事業として始まった『北九州演劇祭』［＊1］は、そんな地域の特色を未来につなぎ、将来の劇場開設まで見据えた動きでもあったんです」

その頃から市は老朽化した小倉北区役所や商業施設の跡地で市街地再開発事業を進めており、勝山公園内にあった旧小倉市民会館の機能を移転し、小倉の真ん中を流れる紫川周辺に文化施設を核とした新しい「街の顔」をつくろうとしていた。劇場を中心にした賑わいづくりという構想に沿って、2000年には津村卓［＊2］氏が招聘されて劇場設立の準備に携わる。そして03年の開館以降、同氏がプロデューサー・館長の立場で長く劇場を支えることになった。

北九州市のような個性ある地方都市で、街を象徴する劇場を一からどうつくればよいのか。初めての挑戦に、津村氏も戸惑いがあったようだ。それでも引き受けたのは、当時の市長をはじめ行政の側から「第二次産業が衰退するなか、文化芸術の力で人を集めてほしい。でも、劇場の使命・役割はあくまで人づくり」という明快な方針があったからという。それを裏付けるように、2000年に市が策定した新劇場の「事業計画書」でも、「人を育てる（人づくり）」が強調されている。

ビジョンとともに劇場づくりで重要な役割を果たしたのが、10年近く続いた演劇祭から劇場へと引き継がれた、地元演劇人や劇団との密接なつながりだ。劇場の設立に当たっては、協議会形式でボトムアップの話し合いが行われ、その関係性は今でも生きている。

北九州市を中心に活動する劇団「飛ぶ劇場」の代表・泊篤志（とまりあつし）［＊3］氏が、劇場の「ローカルディレクター」という肩書きで活動しているのも、大きな特徴と言えるだろう。制作面で演劇関係者と橋渡しを行ったり、地元の演劇ファンに何が求められているか、熟知する人の視点を現場に取り込んでいる意味は大きい。

〝経済活動としての演劇〟を根づかせるための10年間

街の顔となり、賑わいづくり、人づくりの拠点となることを目指す北九州芸術劇場は、小倉城にも隣接する市の中心部に位置し、市立美術館の分館や映画館、ショッピングモールなどが入る複合ビル「リバーウォーク北九州」内に建設された（10頁図）。大ホールから小劇場まで3つの「ハコ」や稽古場も備え、地方都市の公共劇場としては恵まれた設備を誇る。

そんな北九州芸術劇場は「観る」「創る」「育つ」「支える」という4つのコンセプトを掲げている。冒頭で紹介した活動はその具現化の一部とも言えるが、ここに至る道はけっして平坦なものではなかった、と龍氏は振り返る。

「当時は公演を大企業や労働組合が主催することも多く、演劇鑑賞を福利厚生として位置づけ

■図：「北九州芸術劇場」の所在地

劇場があるのは小倉城に隣接する、複合ビル「リバーウォーク北九州」（写真奥の赤色の建物）の6階部分。1200人以上を収容する大ホールのほか、舞台と客席が近く演劇やダンスの公演に適した中劇場、平土間型の小劇場を備える。撮影／古里麻衣

ることも多かった土地柄ゆえ、開館当時、『お芝居は無料で観るもの』と思っている住民の皆さんも少なくありませんでした」

〝経済活動としての演劇〟という意識の弱いところに、どうやって持続可能な形で劇場を根づかせたのか。

「まずは少しでも多くの人に劇場に足を運んでもらう。最初の5年くらいはとにかく『観る』というコンセプトを大切に、ラインナップを充実させました。この劇場で、どんなことができるのか――それを少しでも知ってもらえたと感じたのは、10年ほど経ってからです」

その後は、東京・大阪からも人気劇団の魅力的な演目を呼び、劇場のリピーターが少しずつ多くなった。今や大都市のファンにも羨まれるほど充実の公演スケジュールは、まさに「観る」ための劇場がもつ地力を示すものと言えるだろう。それとともに、最先端の機材を使いこなすスタッフも経験を積み、演劇界でも存在が認知される。観客も目が肥えて、高いレベルの演目を求めるようになる。「北九州のお客さんは反応がいい。スタッフも演劇を愛しているのがわかる。また、ここでやりたい」と、感想を残していく演者や制作者も増えた。

最初の10年間は、こうした「観る」劇場づくりを中心に地道な努力を重ねつつ、地域に根ざした作品を生み出そうと（＝「創る」）模索し、ここで演劇に関わる人を増やしていったという（＝「育つ」）。それは同時に、旧市民会館の機能を引き継ぐこの劇場を通じて文化活動を行う市民の環境づくりにもなった（＝「支える」）。

観るから、創る、育つ、支える へ「劇場の外に出る」ことの意味

やがて、4つのコンセプト相互が密接に関わりながら、北九州市独自の文化芸術を育むという同劇場ならではのミッションが、運営スタッフにも見えてくるようになった。龍氏が思い出すのは、当初から津村氏が強調していた「劇場の外に出ていくこと」という言葉だ。

「当時はまだ、各事業をとにかく滞りなく進めることが大変でピンとこなかったのですが、『街に暮らす人たちとどう向き合えるか、それが地域の劇場が本来もっている活動の意味だ』と、いつも言われていましたね」

ならば「劇場の外に出る」とは、どういうことか。それを掴んだきっかけについて、舞台事業・広報係チーフの吉松氏が語ってくれた。

「2010年くらいに、駅に近い京町銀天街の方と知り合いました。皆さん、再開発により賑わいの中心からややはずれて、さびれつつあるという危機意識をもっておられた、ちょうどその頃――私たちも劇場の中だけでは何かが足りないと感じ、街で暮らす人たちと向き合うには？と真剣に考えはじめていたんです。そこでまず、商店街の空き店舗を借りて『京町小屋寄席』という仮設の舞台をつくりました。そこを起点に、イベント時などにさまざまなパフォーマンスを行う、という活動から始めたんです」

活動を通し、劇場の存在をよく思わない人がいることにも気がついた。劇場の客にとって商店街は、ただの「通り道」になってしまっていたからだ。けれども、このコラボレーションを通じて両者が関係を結び、互いに歩み寄ったという「実感」をもてた。小さな企画ではあったが、劇場スタッフの間では今も、大きなターニングポイントとして記憶されている。

上／高齢者の記憶から生まれた物語を舞台にした『Re：北九州の記憶』の公演。下／高齢者に取材する若手劇作家。お年寄りが生き生きと話す人生のひとコマが、劇作家の心を動かし、舞台へと結実する。写真提供／北九州芸術劇場

個人の記憶から場所の記憶を若い才能と共に紡ぎ出す

このように、設立後10年経った頃から、北九州芸術劇場は「外に出る」姿勢を鮮明にしていった。劇場がようやく地力をつけ、市民の間でも存在が広く認知されてきたことが、それを可能にしたと言える。

なかでも、街に暮らす高齢者に地元の若手劇作家たちがインタビューをして「記憶」を集め、演劇の形で残す「Re：北九州の記憶」の公演は、2013年に始まり、各方面から高い評価を得ている。単なる記録ではなく、フィクションを芸術的な手法で「創る」営み。劇場側も、それが「創る」活動であることを強調する。

各20分ほどの長さの作品には、門司港駅や製鉄所、若戸大橋や百貨店・井筒屋など、北九州市らしい場所や食べ物、あるいは歴史的な出来事が色濃くにじみ出ている。個人の記憶と暮らした街へのプライドが地域の記憶となり、今を生きる人たちにも届く。作品を観れば魅力は誰の目にも明らかだが、おそらくは多くの人にとって未知の試みだったに違いない。

「最初は、お年寄りが語った通りに劇になっていない、とご本人から怒られたこともありました」と苦笑する吉松氏も、この企画が以後10年も続くとは思っていなかったという。

「個人の記憶を扱うことの重み、そして地域の人との向き合い方を、身をもって教わった1年目でした。おかげさまで公演もご好評をいただき、長く続けることができたんです」

その後の10年間で、インタビューに協力してくれた高齢者は73名、劇作家50名、出演者117名を数える。作品づくりを通して人が「育つ」うえでも、その意味は重要だった。構成・演出の内藤裕敬（ひろのり）［＊4］氏の指導・アドバイスもあり、若い劇作家たちには貴重な創作体験となったという。そして計2000人もの観客が、小劇場で上演された作品を「観る」。さらに全89作の戯曲は毎年、本としてまとめられ図書館に寄贈されるなど、さまざまな波及効果が長い時間をかけて広がった。

障がい者や若者、子どもとの表現活動がもたらしたもの

2013年に始まった福祉分野におけるコラボレーションの豊かさも、「外に出る」劇場の面目躍如と言える。

「その頃、市内福祉施設の活動などを調べ、『北九州市障害者芸術祭』の存在を知りました。バレエや日舞など表現活動をする人たちの、いわば発表会のようなもので、市民からはあまり知られていません。劇場として、こういう人たちとつながり、何かをやってみたいと考えました。そこで、関西を拠点に活動するセレノグラフィカ［＊5］さんというダンスカンパニーのおふたりに声をかけ、関わっていただいたところ、すごく可能性を感じたんです」

劇場側で、あらかじめ企画を立てるのではなく、まずは出会うことからはじめ、何をしたいかを一緒に考えた、と吉松氏は振り返る。

コンテンポラリーダンスのワークショップに始まり、障がいの有無にかかわらず一緒にダンスを楽しむというプロジェクトが、「レインボードロップス」と名付けられ、2016年の小劇場での単独有料公演にまでつながった。出会いの質と中身が、その後の活動のあり方を決めていったのだ。この時は、吉松氏をはじめ劇場スタッフも積極的に舞台に参加したという。

「すごくいい経験でしたね。言葉を使わない身体コミュニケーションの有効性を実感しました。何よりも障がい者という存在に、これまで私がもっていたイメージが壊された……彼らのために何かするというよりも、私たちの受け取るものが、とても大きかったんです」

北九州市子ども・若者応援センター「YELL（エール）」との協働事業である「若者応援芸術

上／障がいの有無を越え、メンバーが一丸となっての「レインボードロップス」のダンス公演。下／ダンスが無ければ出会わなかった人たちが、稽古を通じてインクルーシヴな関係を育んでいく。写真提供／北九州芸術劇場

プログラム」も、同時期に始まった福祉的な意義をもつプログラムだ。表現活動に携わるアーティストたちが、社会生活を営むうえで悩みや困難を抱えた若い人たちと共に、さまざまな芸術体験を行う。ダンスや演劇、紙芝居など、体験から創作、そして発表へと進んでいくケースが多いが、こちらも協働先とアーティストと共に考え進めていった。

「内に秘めているものを出せるところに、よさがあると思います。農業体験や販売体験などに比べて、このプログラムを体験した若者たちの復学率や就職率は高いそうです」（吉松氏）

出会いが社会的包摂を生み 育った才能が地域に貢献する

「育つ」を大きな目標に掲げる北九州芸術劇場は開館以来、市内の小学校や中学校へのアウトリーチ活動にも力を入れている。行事としての学芸会とは違う「答えのない授業」を展開するため、演劇人やアーティストが本気で子どもたちと向き合うのだ。夏休みには、高校生を対象にした「高校生のための演劇塾」も行い、舞台づくりや脚本づくりを経験してもらっているという。

特筆すべきなのは、これら意欲的なチャレンジに関わる地元の演劇人やアーティストが、先述の「Re：北九州の記憶」をはじめ、劇場独自の多様な文化事業のなかで育ってきていることと。当初は関西や首都圏などからの招聘アーティストが担っていた役割を、少しずつ地元のアーティストに担ってもらうことが可能になってきているのだ。設立から20年の間、街と劇場で育った表現者が、地域のための事業を行ううえで不可欠な力へと成長しつつある。

地元の表現者や舞台芸術を愛する人たちだけではない。これまで直接的な関わりをもたなかった人たちの間にも、劇場が少しずつ根をはり、「一緒に何かやりましょう」と手を差し出してくれているのが実感できるという。

こうした「劇場の外に出る」活動は、何をもたらしたのだろう。私たちのような外部の目からは、「インクルーシブな表現活動」を実現した先進的な事例と映る。その指摘に、龍氏と吉松氏は慎重に言葉を選びながら、劇場をつくってきたスタッフとしての実感を語ってくれた。

「ある時期から、社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）が盛んに言われるようになりました。結果として私たちがやってきたことに、すごく重なるとも感じます。ただ、それは後から振り返った話。社会のため、という大きな目的を掲げてやったことではないんです」（龍氏）

「出会うことが先で、私たちはむしろ過程を大切にしながら育てていった感覚があります。この人たちと一緒なら、こんなことができる。あんなことをすれば、楽しい。今はそのタイミングではない……など。その時のベストを探した結果だと思います」（吉松氏）

コロナ禍を経ての新たな歩み 静かに広がる文化芸術の輪

そして今、劇場がつないだ新たな文化的活気は、イベントをやって「終わり」ではない、新たな動きにつながっているという。赤いシャツを着たダンサーが街なかで踊る、「夕暮れダンス」の企画は、その好例と言える。

「角打ち（かくうち）［＊6］」や居酒屋、橋の上などで行われるダンスのプロジェクトを観て楽しむだけでなく、自分も踊ってみたい、と思った人がすごく多かったんですね。劇場の活動としては終わったのですが、観ていた皆さんが新たにグループを結成するなど、私たちの手を離れ、独自の市民文化に展開していると感じます」（吉松氏）

そうしたなかから、多い時で年間40本ものイベントに招かれるという「おやじFlavors」をはじめ、いくつものグループが地域の祭りを盛り上げるなどの活動を行っている。オリジナルダンスをもつ企業や、商店街なども増え、北九州市に「踊れる街」という新たなイメージをもたらす効果も生まれつつあるという。

もちろん、他の舞台芸術の例にもれず、2020年からのコロナ禍で北九州芸術劇場が地域をつないできた活動の多くも、大きな制限を受けた。

「今は少しずつ立て直しながら、これからの時代を生きる若い表現者たちと心新たに出会いたい、と思っているところです。彼らが育つ環境づくりをリスタートしたいですね」（龍氏）

そのために準備したのが、劇場が開設する学校とも言える「キタゲキスクール」だ。培った人的なネットワークをフル活用し、豪華なクリエイターや舞台関係者に講師を依頼。戯曲づくりから、より幅広い文化政策、アートマネジメントまで多岐にわたるワークショップや講座のほか、作品づくりの実習も半年で行う。

10年の節目を迎えた「Re：北九州の記憶」も、現在、全国のさまざまな地域から注目されている。岡山県や徳島県などでは、この手法を取り入れた新たな試みが始動。先駆けとなった北九州市でも今年から、個人ではなく、合併後の街を構成する個性的な旧5市（門司、小倉、若松、八幡、戸畑）の地域性に焦点を当てた形で再出発する。そこには、劇場と地域が直面する課題や状況とともに、「観る」「創る」「育つ」「支える」を自在に組み替えながら活動を進めていくという強い意志が感じられた。

最後に、地域における文化芸術、あるいは舞台芸術の意義をどう捉えているのか、という直球の疑問を投げかけてみた。

「今の社会はひとつだけの答えを求めがちですが、文化芸術の答えはひとつではない。そういう豊かさ、深さが一番の魅力ではないでしょうか。『自分ではない何か』を演じるというのは、実はハードルは高くないんだなと感じています。それは自分が感じたもの、自分の中から出てきたもの、無心の表現だったりする。こういうものには、小さな子どもが出会ってもいいし、何歳になってから出会ってもよいものだと思っています」

答えや枠組みを最初から設定せず、街に出ることで人と出会う――その過程を大切にしながら、ものづくりを進めてきた劇場スタッフ全員の想いを、吉松氏が代弁する。

特権的で四角四面の大きなハコから、さまざまな境界を越えて地域に浸透し、異分野との出会いや気付きを与え、背中を押してくれるような存在へ。文化芸術の新たな価値をつくる劇場の取り組みに、あらためて心躍るものを感じた。

上／居酒屋やビアホールなどに乗り込み、乾杯を盛り上げる「夕暮れダンス」。下／「地域のアートレパートリー創造事業」で創作した北九州市芸術文化振興財団オリジナルダンス。写真提供／北九州芸術劇場

注

＊1 1993年、北九州市市制30周年記念事業としてスタート。以後、北九州芸術劇場設立に至る11回の開催で観客数は18万人を超え、国内外の有名劇団が数多く招聘された。

＊2 一般財団法人地域創造芸術環境部プロデューサー。信州アーツカウンシル長。1956年、大阪市生まれ。扇町ミュージアムスクエア（OMS）をはじめ国内各地の劇場の運営に携わり、近年では上田市サントミューゼ館長、長野県芸術監督（プロデュース）などを歴任。

＊3 劇作家・演出家。「飛ぶ劇場」代表。1968年、北九州市生まれ。北九州大学に在学中、演劇研究会で上演作品の執筆・演出を担当。95年に「飛ぶ劇場」の代表を引き継ぐ。97年の第3回劇作家協会新人戯曲賞をはじめ、受賞多数。

＊4 劇作家・演出家・俳優。劇団「南河内万歳一座」座長。1959年、栃木県生まれ。大阪芸術大学在学中に劇団を旗揚げ。扇町ミュージアムスクエア（OMS）を本拠に、関西小劇場の牽引役として活躍。母校の教授として後進の指導にも当たる。

＊5 1997年、隅地茉歩と阿比留修一により設立。関西を拠点に国内外・屋内外を問わず、幅広く活動を展開するダンスカンパニー。多様な解釈を誘発する不思議で愉快な作風と、緻密な身体操作が持ち味。

＊6 酒販店の店内において、その店で買った酒を飲むこと。また、それができる酒屋のこと。工場で働く労働者のために、北九州に角打ち文化が生まれた。

龍亜希（りゅう・あき）
北九州芸術劇場プロデューサー。福岡県生まれ。2003年（公財）北九州市芸術文化振興財団舞台事業課 事業係に配属。おもに招聘事業を担当した後、09年より事業係チーフ、12年より舞台事業課チーフを務め、15年より現職。

吉松寛子（よしまつ・ひろこ）
北九州芸術劇場 劇場事業課 舞台事業・広報係チーフ。福岡県生まれ。2008年（公財）北九州市芸術文化振興財団 舞台事業課 事業係に配属。おもに招聘事業を担当した後、12年より劇場オリジナルの作品創作を行う創造事業や学校アウトリーチ、福祉分野でのワークショップなどを行う学芸事業にも従事。19年より現職。